

優秀賞

『図書館の魔女』 高田大介著

文学部 文学科 1年 秋田珠希

違う、そういうことを言いたいんじゃない。

他者と会話をする中で、誰でも一度は思ったことがあるだろう。思う回数が多い人ほど、自分を卑下し、諦めたように言う。「どうせ自分はコミュ障だから」。「コミュ障」は、「コミュニケーション障害」の略である。だが、彼らは話す内容がないのかといえばそうではない。読書やインターネットで多様な知識を有する人も多いただろう。趣味のことならば自信があるという人もいるかもしれない。話したいことはあるのに、なぜ会話になるとうまく伝えられないのか。

「図書館の魔女」も、コミュニケーションに苦勞する少女である。この物語は、国を乗っ取ろうとする大国を相手に、図書館の人々が、言葉によって立ち向かうファンタジームステリーだ。図書館長の少女、マツリカは、誰よりも言語に通じると言われるが、自分の「声」を持たず、手話で会話する。

「声」は、人間が生きる上で欠かせない物である。風邪をひいて、声が出ない時のことを想像してほしい。「水をとって」や「通らせてください」といった簡単な言葉でさえも、伝えることができないのである。たとえ声なしで伝わったとしても、そこにはタイムラグが生じている。マツリカは、手話を豊かに使えるため、自分の意思を伝えることができるが、そのタイムラグに悩まされていた。返答が相手に届くまでの時間差によって、その返答の意味が失われることも多いからだ。「今日の前に起こったことに気の利いた評釈があったとしても、書付けを十秒後に手渡すのでは掛け合いにもなりはしない」のである。だが、マツリカは諦めない。本書の中で、彼女は、身体能力に優れた少年と出会ったことで、新たな手話を思いつく。自分で作った手話を、少年に同時通訳してもらうことによって、自分の言葉をより自在に表現できるようになる。健常者との会話で障害となる、タイムラグを取り除くことに成功するのだ。

この本では、マツリカの知力の高さが幾度も示される。例えば、ほんの僅かな言葉の使い方から、推理して相手の企みを暴いてしまったことがあげられる。助言を得ようと面会を求める上役が後を絶たないことや、貴族たちがうら若い彼女に頭を下げることから、マツリカの知力に対する信頼はうかがえる。知識のある彼女だからこそ、その意図が完全に伝わった時、与える影響は計り知れない。何より本人が嬉しかったことだろう。

言葉は人に伝わって初めて生きる。その伝え方は、他者と関わることで磨いていくしかない。だが、伝え方は声による会話だけとは限らない。表情、仕草、文章、音楽など、伝え方は無限にある。一つの手段にこだわらず、自分に一番適した方法を探せばいい。会話にしても、工夫すれば改善できるかもしれない。新しい手話で、手話の欠点を補ったマツリカのように。どちらにせよ、「コミュ障」だと簡単に諦めることはない。

もう一度誰かに伝えてみようか。そんな勇気が出る本だ。